

【特集】

ロシア帝国のポーランド人と 1830-31 年のコレラ

越野 剛

はじめに

1831 年夏のペテルブルクはコレラが猛威を振るい、都市の住民は恐慌状態にあった。首都に住んでいたポーランド人作家のオシプ・ブシェツワフスキは次のように当時を振り返っている。

ペテルブルクでコレラが発生したのがちょうど最初のポーランド反乱の時だったので、首都の住民の大多数は、ありもしない毒殺はポーランド人が買収してやらせたものか、あるいは直接に手をくださったものだと迷いもせず決めつけた。夜になるとポーランド人が菜園に分散して野菜に毒を撒いているとか、こっそりと建物の門をくぐって中庭に置いてある水桶に毒を入れるとか、叛徒が雇った船に砒素を一杯に積みこんでネヴァ川に流しているというような馬鹿げた話が町中に広がって繰り返し語られた。いろんな工房の見習の少年や工場労働者が先頭に立ち、興奮した平民たちが徒党を組んで街路を行き来し、どういうわけだか「コレラ犯 холерщики」だと思われた人はだれでも殴って、ときには責めさいなどで殺してしまうこともあった。(…) ペテルブルクのポーランド人は悲しむべき立場に置かれていた。彼らはロシア人の家庭に行くことを止めてしまった。主婦が大テーブルに茶を出す際に、ポーランド人から目を離さず、砂糖壺、クリーム、クッキーを離れたところに置くようになったからだ¹。

19 世紀においてコレラは未知の現象だった。その実体が目に見えないにも関わらず、死を招く危険な症状だけが目の前に存在するという状況は、その正体をめぐる実は根拠のない言葉だけを増殖させる。メディアを通して拡散される言説が強いリアリティを持つとも言い換えられる。症状をもたらずコレラ菌はまだ発見されておらず、身体接触によって病気が感染するのか、瘴気（ミアズマ）が空気を伝わって症状を引き起こすのかをめぐって結論の出ない論争が続いた。人や物の移動を止めるのが有効かどうか、論証もできないうちに厳格な検疫のシステムが導入された。神による罰というような超越的な領域に原因を求めることもできたが、何らかの特定の社会集団が毒を撒いているという説明の方がはるかに合理的であり、近代的であったとさえいえ

る。医師、警察、外国人など、様々な集団に疑いがかけられたが、ロシアでは支配下にあったポーランドで1830年末に大規模な反乱が発生したこともあり、住民の大量死はポーランド人の陰謀によるものだという妄想が現実味を帯びてしまった。

ロシアにおける伝染病やコレラの歴史には多くの先行研究がある。1830年代のコレラ禍についてはマックグリュウの社会史的な研究が今日においても価値が高い²。文化史の観点ではボグダノフが疫病と戦争の言説の類似性を指摘し、コレラをめぐるテキストの交差の中で敵・英雄・犠牲者などのイメージが生み出されるプロセスを分析している³。ポーランド人が毒殺者だという流言が存在したことはよく知られているが、専門的に研究したものは管見の限りではマルティノヴァの小論だけであり、噂を語る主体（農民、兵士、都市民）と語られる客体（外国人、貴族、医師）の関係がよく整理されている⁴。本論ではコレラ禍とポーランド11月蜂起を通して、ロシアにおけるポーランド人のイメージがどのように変化したかを考察する。同時代人の書簡や回想記の言説を題材にして分析するが、その他にアダム・ミツケーヴィチとファデーイ・ブルガーリンというロシアで活躍した2人のポーランド人作家に焦点を当てる。ミツケーヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』が描く正体を隠したアンチヒーロー像が重要な役割を果たすことになる。

1. ロシアにおけるコレラ禍の概況

コレラはインドの風土病として存在していたものが、19世紀に入って初めてグローバルな感染症になった。本論で扱うのは第2次パンデミーとよばれる時期のもので、ヨーロッパの人々にとっては初めてのコレラ流行である⁵。中東からたびたびロシア帝国内に浸透した伝染病は1829年8月にオレンブルクまで到達し、30年から31年にかけてモスクワとペテルブルクを含むロシア帝国の中央部分を荒らして回り、さらにポーランドを介して西欧に拡大していった。ロシア全体では50万人以上の感染者を出し、その半数近くが死亡したとされる。両首都でもそれぞれ5000人に近い死者を出した。

詩人のプーシキンのこのときの体験をみると、1830年9月1日⁶に領地の管理のためモスクワからニジノヴゴロド県のボルジノ村に移動している。ニジノヴゴロドでは8月にコレラが発生し、ちょうどプーシキンと入れ違うように、コレラは東から西に移動してモスクワに到達した。コレラについて貴重な記録を残しているモスクワの貴族クリスチンによれば、9月初めにニジノヴゴロドからモスクワにきた商人が、その道中で二人の息子をコレラでなくしたという⁷。9月18日にモスクワは閉鎖され、年末にいたるまで感染者が出続けた。感染を妨げるための検疫線が引かれたせいで、プーシキンはボルジノ村に長期滞在を余儀なくされる⁸。いわゆる「ボルジノの秋」といわれる創作の波はこの時期に訪れた。村で書かれた多くの作品の中でも、詩劇『ペ

『スト流行時の酒盛り』は、当時の詩人の心境を映し出しているようで興味深い。

コレラは冬季にいったん収束するかに見えたが、1831年の夏に今度はペテルブルクを恐怖に陥れる。コレラなどという病気は存在せず、何者かが毒を撒いているという根拠のない噂が広まり、「犯人」の制裁を求める住民の暴動が発生した。これは前年のモスクワでは起きなかった事態である。民衆の暴力には様々な要因が考えられるが、ここでは30年末から始まったポーランド反乱とコレラの関係に焦点をあてて考察したい。

1830年11月のワルシャワでの蜂起に対抗して、翌年1月にはディビチ将軍の率いる軍が鎮圧に向かう。夏までには反乱は収束するが、その過程でコレラがポーランドでも猛威をふるうようになった。東方に由来する未知の疫病の脅威は残虐な専制ロシアのイメージと容易に結びつき、ポーランド側や西欧の一部では、感染源としてロシア軍を批判する動きが見られたが、実際には交易などの複数の経路を介して病気が広まったようだ。4月10日のイガニエの戦いに際して、両軍に多くの患者が発生した⁹。5月にはワルシャワに疫病が到達している。

5月末にはロシア軍のディビチ将軍が急死するというショッキングな出来事が起こる。公式発表では死因はコレラとされたものの、興味深いことに、その死因が実は毒だったという噂がこのとき囁かれたことが知られている。誰も見たことのない伝染病よりも、分かりやすい説明が求められたといえる。もともとこの時点では敵（ポーランドの反乱者）に毒を盛られた可能性よりも、ニコライ1世の不興を買ったディビチが自ら毒をあおったと考える人の方が多かった¹⁰。マックグリュウはディビチの死をめぐる議論が、毒殺説のひとつの枠組みを作ったと推察している¹¹。

ペテルブルクでは最初のコレラ患者が6月15日に見つかったから、7月にかけて疫病が猛威をふるった。北方の首都での感染対策は前年のモスクワよりも厳しく、患者への対応も医療従事者ではない警察官に依拠するところが大きかった¹²。健康な人間までも強制的に病院に連れていかれるのではという恐怖と不信感が都市民の間に高まっていく。コレラなどという病気は嘘であり、水や食物に毒が入れられているという噂は早くから囁かれていたようだ。ペテルブルク大学教授ニキチェンコの6月20日の日記には、人々がそうした「馬鹿げた噂」を信じていると早くも記されている。「ドイツ人医師やポーランド人に対して罵り、皆殺しにしてやると脅す」ような者までいたという¹³。

流言と並行して都市民のふるまいも殺気を帯びてくる。6月21日は日曜日にあたり、未曾有の危機に怯える人々のため特別な祈禱と十字架行列が教会によって組織された。しかし集まった群衆は儀礼が終わっても解散せず、存在しないはずの病気のせいで収監された患者を「解放」するため、市の東側にあるロジェストヴェンスカヤ区の病院を襲撃した。この企ては失敗に終わるが、人々の興奮は鎮まらず、暴動の中心は

都心部のセンナヤ広場に移る。22日には広場に近い病院に群衆が突入して、ドイツ人の医師が殺害された。患者を運ぶ馬車も市内の各地で行く手を阻まれた。事態を重く見たニコライ1世はペテルゴフの離宮から急きょ首都に駆け付け、23日には暴徒の集まるセンナヤ広場に乗り込んだ。皇帝は民衆に対してカリスマ的な権威を発揮する。最初の一喝で人々は跪き、おとなしく皇帝の演説に耳を傾けたという。いくぶんかの脚色はあるだろうが、皇帝その人は善良であり、そのとりまきの高官たちが腐敗しているという民衆のツァーリ幻想が機能したと考えることもできる。

センナヤ広場の騒乱は収まったものの、緊張感を孕んだ首都の雰囲気はしばらく残存した。6月29日はペテロ・パウロの祭日だったこともあり、酔っぱらった農奴身分の職人が、歩哨中の退役下士官がポーランド人から勲章をもらって人々を毒殺しようとしていると因縁をつけ、暴れまわった挙句に逮捕されるという事件が起きている¹⁴。

7月末にはノヴゴロド県のスターラヤ・ルッサを中心とした屯田兵地で大規模な暴動が起きた。このときも何者かが毒を撒いているという噂が、民衆の暴力の引き金となった。アレクサンドル1世期の高官アラクチャーエフによって創設された屯田兵制度は、入植させられた兵士たちに過酷な負担を強いるものであり、彼らの間で不満が蓄積されていたことも背景にある。貴族身分である将校の多くが、毒殺者として疑われ、リンチや拷問を受けた。騒動は10日近くにわたって続き、軍隊の出動によってようやく鎮圧された。

2. ミツキューヴィチ『コンラット・ヴァレンロット』の疫病と反乱

アダム・ミツキューヴィチはロシア統治下の故郷リトアニアを追放されてから、1820年代の後半をロシアの各地で暮らし、プーシキン、ルイレーエフ、そして後に詳しく触れるブルガーリンなど多くの作家・知識人と交流し、バイロンのような反逆あるいは悲劇のヒーローとして社交界に受け入れられた。ミツキューヴィチがロシア国内で刊行した叙事詩『コンラット・ヴァレンロット』（1828年）は、ドイツ騎士団の侵略にあらがうリトアニアの物語だが、ロシアをはじめとする列強の支配下にあるポーランドを意識して書かれている。「奴隷の武器は裏切り」という有名な台詞に示されるように、主人公コンラットは崇高な目的のためには卑怯な手段を取ることをためらわない。リトアニア人という正体を隠してドイツ騎士団の指導者に選ばれ、自軍を故意に敗北へと導くという主人公のふるまいは、後には「ヴァレンロット主義 wallenrodyzm」として賛否両論を呼び、愛国的ポーランド人のジレンマをよく表現する概念となった。

検閲を無事に通過してペテルブルクで出版された『コンラット・ヴァレンロット』はすぐにロシア語に翻訳され、ポーランド人社会だけでなくロシアの文壇でも好意的

に評価される¹⁵。しかし 1830 年にワルシャワの士官学校の生徒たちがポーランド総督コンスタンチン大公のいるベルヴェデル宮殿を襲撃して、いわゆる 11 月蜂起が起きると、「言葉は身体となり、ヴァレンロットはベルヴェデルになった」という標語が広まったことからわかるように、ミツキューヴィチの作品が反徒の心情を形成した要因のひとつであったことは疑いえない。ドイツ騎士団への反逆の意図を隠した主人公、そして専制ロシアへの反逆の意図を隠した作品とその出版という二重の面従腹背の構図が後付けで明らかになった。ロシアにとってヴァレンロット主義は、うわべは服従をとりつくろっても、内心では裏切りをたくらむポーランド人という危険なイメージを指すものとなっていったのである。

『コンラット・ヴァレンロット』の第 4 章に挿入された「吟遊詩人の歌」には、ペストをもたらす「疫病の乙女 *morowa dziewczica*」が登場する。白装束に燃え盛る花冠をかぶった乙女がリトアニアの地に出現して、血まみれのハンカチを振ると、町は次々に墓場になってしまう。『コンラット・ヴァレンロット』の原注によれば、ミツキューヴィチ自身がかつてリトアニアで疫病の乙女についての伝承を採集したという¹⁶。ロシア語の *чума* やポーランド語の *dżuma* のように、スラヴ語ではペストを示す単語は女性名詞であり、フォークロアでは伝染病が女性の姿をした怪異としてしばしば表現される。ペストに比べると新しい病気である「コレラ *холера, cholera*」は外来語とはいえやはり女性名詞であり、同じようなイメージで想像された。ミツキューヴィチが作品を構想した段階では、近い将来においてポーランドの反乱が起きると同時にコレラが恐怖の的になることは予想できなかったはずである。しかし結果として「疫病の乙女」の描写は、疫病と革命を結びつける不吉な予言となった。

ミツキューヴィチに傾倒していた若いレールモントフは¹⁷、1830 年のモスクワで体験したコレラ禍をふまえて『予言』という短い詩を書いた。「腐臭漂う屍から現れた疫病 *чума* は／悲惨な村々をさまよい歩き／陋屋からハンカチを振って誘う」¹⁸。疫病が不吉な女性の姿で表現されること自体は、上述したようにスラヴの民間伝承では珍しくない。しかし病気を体現する女性の魔物がハンカチ *платок* を振るというモチーフは、ミツキューヴィチが記録したリトアニアのフォークロアに特徴的なものであり、『コンラット・ヴァレンロット』に直接の影響を受けたと考えられる¹⁹。レールモントフはこの作品で民衆の暴動や革命、専制者の処刑を幻視しており、疫病のイメージはその予兆として位置づけられる。リトアニアの地のペストと戦乱を重ね合わせるミツキューヴィチの「疫病の乙女」と同じ役割を果たしているといえよう。

3. 毒殺者の噂とコレラ暴動

コレラそのものが感染するだけではなく、むしろ疫病にまつわる噂話が広く伝播することで、民衆の暴動が誘発される構図が見られる。センナヤ広場での騒乱は、ペテ

ルブルクでの感染がピークに達するよりも早く、根拠のない流言の方がコレラよりも先に拡散した初期の段階で起こった。一方で6月末から連日200人を超える死者が記録されるようになると、もはや暴動どころではなくなってしまう。6月28日のニキチェンコの日記には次のように記されている。「病気が地獄の力でもって荒れ狂う。ちょっと通りを出歩くだけで、何十もの棺が墓地に運ばれていくのに遭遇する。民衆は暴動を起こすのではなく、無言の深い悲嘆にくれるようになった。一切合切が破壊される時が来たかのようで、人々は死刑を宣告されたかのごとく、すでに最期の時が告げられたのかどうか分からないまま、棺の間をさまよい歩いている」²⁰。

スターラヤ・ルッサでは本当の患者は一人も見つかっていないのにも関わらず、大規模な反乱だけが引き起こされた。事件の目撃者の多くがコレラ患者を見ていなくても、人々の間で語られていた毒殺者についての噂には言及している。同じ時期のモスクワではコレラはすでに収束していたが、不穏な言葉だけが確実に伝わってきている。モスクワの郵便を管轄していたアレクサンドル・ブルガーコフは、6月29日付の手紙で市内の噴水で毒の入った袋が発見されたというニュースを伝えている²¹。7月21日のクリスチンの手紙によれば、人々は17世紀の有名な連続毒殺犯である「ブランヴィリエ侯爵夫人の精神」に煽られ、「毒を盛られた人、毒を盛る人、そして毒殺の話ばかりしている」。このとき、売り物のほうきに毒が仕込まれているのではないかと疑われたドイツ人の行商人の一家が、群衆の暴力を逃れてクリスチンの住む建物に逃げ込むという出来事も起きた²²。

毒殺者についての不合理な噂は専ら無知な民衆が信じるものとされている。7月6日付のチャアダエフ宛の手紙でプーシキンは次のように書いている。「民衆 *people* の想像によるとペテルブルクでは毒殺が行われている。新聞は躍起になって脅したり叱りつけたりしているが、残念ながら民衆は読み書きができないので、流血の事態がいつ繰り返されるか分からない」²³。当時はまだ10代の少女だった作家アヴドチャ・パナエヴァの回想によれば、「民衆 *народ* の間には、ポーランド人や彼らに買収された医者が毒を撒いて、病院で人々を殺そうとしているというような愚かな噂が広まっていた」という。彼女はペテルブルクの通りに面したバルコニーから、毒殺犯であることを疑われた男が群衆に暴行を受けるところを目撃している。それは子供にキセーリをご馳走してやろうと材料を買い求めていた貧しい役人で、ポケットに入れたジャガイモの粉が屋台の店先でこぼれ出してしまう、毒薬を持っていると疑われたのだった。役人は危ういところで通りに駆け出してきたアヴドチャの父親に救出された²⁴。

当時の出来事を記録したり回想したりする人々の多くは、コレラの正体は毒であるという噂を信じてはいない。読み書きのできない下層階級の人々、農民、兵士、都市民などの間で虚偽の情報がもっぱら口伝えで広まり、外国人、役人、地主貴族に対して従来から抱かれてきた不信感や嫌悪を増幅させたと考えられる²⁵。しかし貴族や知

識人の間でも独自の噂話のネットワークは形成されていた。ペテルブルクの疫病や暴動の話聞いたモスクワのクリスチンは、毎日のようにそれらをトゥーラに滞在中のボプリンスカヤ伯爵夫人に知らせている。ペテルブルクとモスクワの郵政局にそれぞれ務めていたコンスタンチンとアレクサンドルのブルガーコフ兄弟はコレラについて盛んに情報のやりとりをしている。

ノヴゴロド県でのコレラ暴動の目撃者である役人ソコロフは、貴族身分の地主や将校がポーランド人に買収されて、井戸や川、森の野イチゴやキノコにまで毒を撒いているという噂について、「理解しがたい精神異常 непостижимое умопомрачение」や「奇天烈な考え химерная мысль」だと形容している。その一方で民衆に対して地主や将校を抹殺せよという偽の布告を出して暴動を扇動した人々のふるまいは「ポーランド人の加担なしではありえない」と推察されている²⁶。モスクワのアレクサンドル・ブルガーコフは、ワルシャワで反乱が起きて以降、ポーランド人への敵意をしばしば吐露しており、6月23日付の手紙ではモスクワ市内で陰謀を企むポーランド人が摘発されたという知人から伝え聞いた怪しげな話を記している²⁷。恐らく同じ類の話聞いたと思われるクリスチンは、6月30日付の手紙で、ペテルブルクのコレラ暴動と並行してモスクワでも市内に放火して混乱を引き起こす陰謀があり、ポーランド人が関与しているという噂を伝えている²⁸。

6月23日にセンナヤ広場の暴徒を前に立ったニコライ1世は、「私が来たのはおまえたちの罪に対して神の慈悲を請うためである。神に許しを祈りなさい。おまえたちは神をひどく侮辱したのだから。おまえたちは本当にロシア人といえるのか？おまえたちのしていることはフランス人やポーランド人の真似だ」という言葉を述べたとされる²⁹。念頭に置かれているのは前年に起きたフランスの7月革命とポーランドの11月蜂起である。ニコライ1世も民衆の暴動の背後にポーランド人の存在を意識していた可能性がある。作家デニス・ダヴィドフによると、このとき広場についてきた平民の人々を皇帝は怪しんで逮捕させ、「こいつらはみんな卑劣なポーランド人で、おまえたちを唆したのだ」と決めつけたせいで、せっかくの皇帝の偉業も台無しになったという³⁰。又聞きのアネクドート風の語りなので信ぴょう性は低いですが、センナヤ広場の事件をポーランド人の扇動に結びつける発想それ自体が噂話のように広まっていたことを裏付けている。同日のニキチェンコの日記には、農民風の格好に変装して民衆に金を配り、暴力を煽ったポーランド人が警察に捕まったという噂話が記されている。

1831年のコレラ禍の時期にポーランド人は水源や食物に毒を盛り、さらには役人（医者・警察）や貴族（地主・将校）を買収して毒を撒かせる役割を担ったと想像された。さすがにこの話をまともな受け入れる知識人は少なかったが、ポーランドの反乱に関連して民衆の暴動の背後にはそれを扇動するポーランド人の陰謀があるのでは

ないかという疑いは真剣に受け取られている。ポーランド人＝毒殺者（買収者）という誤った認識が主として民衆のものであるのに対して、ポーランド人＝扇動者という根拠の乏しい言説が民衆とは異なる社会層に広まっていたのである³¹。前者においてポーランド人に買収されるのが役人や貴族などの支配階層であり、後者においてポーランド人に扇動されるのが非支配層の民衆であることを考慮すると、ポーランド人という外部の要因を介することによって、むしろロシア社会内部の断絶があらわにされたと考えることもできる。

4. ブルガーリンとコレラと裏切者の形象

ミツキューヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』の刊行が実現したのには、ペテルブルクの文壇で活躍していたポーランド系作家ファデイ・ブルガーリンの力添えがあったことも大きい。二人はともに旧リトアニア大公国の領域（現ベラルーシ）の出身で、1827年から28年にかけてミツキューヴィチがペテルブルクに滞在していた間に両者は親交を深めた。『コンラット』の原稿が気に入ったブルガーリンは、出版のための費用を引き受けることさえ提案している³²。1828年初めにミツキューヴィチの作品がポーランド語で出版されるとすぐ、ブルガーリンが刊行していたロシア語の新聞『北方の蜜蜂』で「スラヴ諸民族の文学において第一位の座を占める作品のひとつ」として宣伝されている³³。

コンスタンチン大公の側近としてポーランド統治に参与していたニコライ・ノヴォシリツェフは、『コンラット』がポーランド愛国者のロシアへの密かな反乱を意図していることを見抜いていた。ノヴォシリツェフは早くも1828年4月に、ミツキューヴィチとその作品を支持するブルガーリンの危険性を訴える上申書を出しており、政府機関による調査が行われることになった³⁴。一方で皇帝官房第三部（秘密警察）の協力者でもあったブルガーリンは、『コンラット』が中世のリトアニアとドイツ騎士団の戦いを題材にしており、現代のポーランド問題には何の関係もないと反駁する報告書を提出している³⁵。今日の視点から両者を比較してみれば、ノヴォシリツェフの方が『コンラット』の解釈として正確であり³⁶、ブルガーリンの主張が一種の政治的な方便であることは明らかだが、ロシア帝国内に暮らすポーランド人の微妙な立ち位置をよくうかがわせるエピソードだといえる。当局による新たな訴追を恐れたミツキューヴィチは翌1829年5月に出国、二度とロシアに戻ることはなかった。時を経て1855年に、クリミア戦争でロシアに対抗する軍団を組織するためトルコに向かい、その地でコレラに倒れるが、これは第3次パンデミーの時期にあたる。

ポーランドの反乱の鎮圧が大詰めに入り、ペテルブルクではコレラが蔓延していた1831年の夏、ブルガーリンの新聞『北方の蜜蜂』は毎号のように首都の感染者と死者の統計を掲載していた。ポーランド人やその他の外国人がロシア人を毒殺しようと

しているという噂は、ポーランド人であるブルガーリンにとって他人事ではなかったはずだ。7月22日付の紙面にはコレラについての根拠のない流言を否定する記事が掲載されている。もしもポーランドの反乱軍がペテルブルクに毒殺者を送り込んでいたのだとしたら、まず狙われるのは軍隊のはずだが、規律正しい生活を送っている兵士の間では感染者はむしろ少ないという統計的事実があるという。そもそも反乱を起こしたポーランドでもコレラが発生しているのだ。「いったい連中のところでは誰が人々に毒を盛っているというのか。まさか自分たちでというわけもないだろう」³⁷。

10月初めには、教養のある地主貴族が無知な農民を啓蒙するという対話形式の読み物が掲載されている。1770年代にモスクワでペストが流行したときには、露土戦争の最中であったこともあり、トルコ人が毒を撒いているという噂が流れたという故事を引いて、同じ過ちを繰り返さないよう訴えている。しばしば聖書の一節を論拠として引用したり、疫病の原因は人々が神に対して犯した罪のせいだと説いたりしており、農民の宗教観に配慮したように見える論の展開は、ノヴゴロド県の屯田兵地で起きた民衆の暴動を念頭に置いたものと考えられる。地主貴族の話を最後まで聞いた農民の長老は、「世の中のあらゆるところに毒を盛るなんて出来ないのは明らかだし、誰がそれで得をするというんだろう。異教徒もキリスト教徒も、ロシア人もポーランド人もコレラで死ぬわけだから、誰が誰を毒殺するんだって話だね。旦那さん、あんたが正しいよ！」と言って納得する様子だ³⁸。どちらの記事もブルガーリンの意図に沿ったものと考えられるが、少なくとも後者には本人のものと思しき署名があり、読者もそのように理解しただろう³⁹。

ブルガーリンはもともとはルイレーエフなどデカブリストの作家と親しく、プーシキンとも良好な関係にあったが、次第に専制政府寄りの立場を明らかにして、リベラルな知識人の反感を買うようになった。一方で長編小説『イヴァン・ヴイジギン』(1829年)の大成功で、作家としての名声はピークに達している。しかしロシアとポーランドの狭間で政治的な綱渡りを試みてきたブルガーリンの文学的な評価は、1830-31年のポーランド反乱とコレラ禍を契機として、大きくバランスを崩したように思われる。レイトブラットを始めとする近年の研究によって是正されつつあるとはいえ、秘密警察への密告者という20世紀のロシア文学史では通説となっていたブルガーリンの否定的な人物像はこのとき生まれたのである。ブルガーリンが当局に内通していることは、第三部長官ベンケンドルフがその手紙を政府高官の作家ドミトリイ・ダシコフに見せたことがきっかけとなり、1829年末には文壇の多くが知るところとなった⁴⁰。プーシキンが1830年に『文学新聞』(4月6日20号)に載せた記事「ヴィドックの手記について」は、フランスの有名な密偵フランソワ・ヴィドックについてと思わせておいて、実際には文学上の競争相手を当局に密告するブルガーリンを風刺した文章である⁴¹。同じころ、「君がポーランド人なのは大したことじゃない／コシチューシコも

ミツキューヴィチもポーランド人だ！／…／いけすかないのは君がヴィドック・フィグリーリンだってこと」という寸鉄詩を創作して、ヴィドックというあだ名を定着させてしまった⁴²。

ポーランド人としてのブルガーリンの出自や経歴をめぐる当てこすりが、両者の論争を感情的に加熱させた側面もある。1830年3月7日の『文学新聞』14号に、刊行されたばかりのブルガーリンの歴史小説『僭称者ドミトリイ』を酷評する匿名の文章が掲載される。歴史的人物の造形の弱さを指摘するのが主たる論点だが、17世紀のロシアが西欧文明から隔てられた野蛮な異郷として描かれることに不満が隠されていない⁴³。「ロシア人に比べてポーランド人への不公平なえこひいきが随所に見られる」ことは仕方がないとしても、「愛国心は感染するものであり、我々はロシア人作家によって書かれた同じ時代の物語ならばもっと満足して読んだであろう」と断じている⁴⁴。著者はプーシキンの盟友デリヴィグだが、ブルガーリンはプーシキン本人が書いたものだと思ひ込み、数日後の3月11日の『北方の蜜蜂』に反撃の文章を載せた。「文明国フランスでは文学に携わる外国人は当地の人々に特別な敬意を受けている」のであり、「ミューズよりも酒と豊穡の神々に献身するような生粋のフランス人」と「フランスに併合されるまでは自分の祖国を愛し、併合後はフランスも同じように愛した異国人」とを比較して、どちらの作家の方が尊敬に値するだろうかと問いかけている⁴⁵。フランスの文壇の話をしているようで、実際にはプーシキンとブルガーリンを示唆しているのは明らかである⁴⁶。プーシキンがヴィドックのあだ名で密告者としてのブルガーリンを非難するのはこのすぐ後のことである。コレラがモスクワに到達する一か月前の8月7日の『北方の蜜蜂』には、バイロンの模倣者である詩人の誰それが「先祖のひとりが黒人の王子だった」のを証明しようとして、ラム酒ひと瓶で買われたという当時の記録を発見したという一文が現れる⁴⁷。今度はプーシキンの母方のハンニバル家の祖先がアフリカ出身であることが揶揄されており、ポーランド人という出自を非難されたことへの意趣返しともいえる。

翌1831年の夏、ちょうどペテルブルクでのコレラ流行の最中、モスクワの雑誌『テレスコープ』にまたもやプーシキンのブルガーリン批判の文章が掲載される。そこにはブルガーリンとその盟友のニコライ・グレチといったペテルブルクの非ロシア系作家たちがモスクワを軽視する姿勢を非難する一節がある。「モスクワで生まれ育ったのは大部分が生粋のロシア人であり、フランスの軍旗と共に敗走しようが、ロシア語を用いてロシア的なものを汚そうが、どうでもよい、どこだろうと住めば都というような余所者や裏切者はお呼びでない」⁴⁸。1612年や1812年の戦争でモスクワが外国の軍隊に蹂躪された記憶にも言及されており、ナポレオン配下のポーランド軍団に加わり、モスクワ遠征にも参加した過去のあるブルガーリンは、ロシアに対する「裏切者」ということになる。

ここまでの論争を整理してみると、単純にポーランド人であるということがブルガーリンに否定的なイメージをもたらしているわけではないことも分かる。ミツキューヴィチはロシアの敵であるとしても、ポーランドの愛国的な詩人として敬意を払われていた。むしろロシアとポーランドという複数の帰属性を持ち、状況によって立場を変えるようなブルガーリンの姿勢が嫌われた。ノヴォシリツェフがロシア帝国の臣民となったポーランド人の面従腹背を常に疑ったように、それはミツキューヴィチが『コンラット・ヴァレンロット』で作り出したバイロンの裏切者のイメージにつながる⁴⁹。1830年から31年にかけてのポーランド反乱とコレラ禍という危機において、目に見えない敵、ひそかに毒をまくポーランド人という妄想が生み出されたが、それと軌を一にするようにして変節者ブルガーリンという文学史の評価も定まったのである。

まとめ

ミツキューヴィチの『コンラット・ヴァレンロット』の矛盾を抱えた主人公のふるまいは、ポーランドでは賛否両論ありながらもロマン主義の英雄像として受け入れられた。しかしロシアでは1828年の刊行時にはバイロンの反逆者を描いたとして人気を博したにも関わらず、ポーランド反乱とコレラ疫の時期を経て、次第に「裏切者」という否定的な評価がなされるようになる。とりわけ1863年の二度目の大規模なポーランド反乱（1月蜂起）を経ると、ヴァレンロット主義 *валленродизм* という言葉は正体を隠した内通者や裏切者を指すようになる。目的は手段を正当化するというイエズス会士のイメージもしばしば重ねられた。ドストエフスキーやカトコフのイデオロギイ的著作では、ミツキューヴィチの主人公が狡猾で信用ならないポーランドというステレオタイプを示すのに用いられる⁵⁰。

最後にコレラと毒殺者をめぐる噂のテーマに戻ろう。1831年7月の日記にプーシキンは次のように書いている。

去年は検疫のせいで、あらゆる産業が停止させられ、運送路が閉ざされ、仲介業者や御者たちが貧困に追いやられ、農民や地主の収入が減少したので、16の県で危うく暴動が起きるところだった。検疫の指令などというものは、それに携わる人たちにも民衆にも理解できないものであり、悪用されるのは避けられない。検疫を廃止すれば、民衆は疫病の存在を否定するのをやめて、予防措置を受け入れ、医者や政府に頼るようになるだろう。けれど検疫があるかぎり、大きな悪よりも小さな悪を選ぶことになり、民衆は日々の糧や、せまりくる貧困と飢餓について、見たことのない病気なんかよりずっと心配するだろう。その病気の症状は毒によるものにととてもよく似ているのだ⁵¹。

プーシキン自身が検疫のためボルジノ村に閉じ込められた前年の苦い体験を踏まえて書かれていることもあり、実際以上に検疫措置の弊害が強調されているくらいはある。しかし詩人の目は毒殺者という民衆の想像力の背後にある社会矛盾に向けられている。その矛盾はペテルブルクのセンナヤ広場やノヴゴロド県の屯田兵地において、暴力という最も極端な形で露わになったといえる。コレラという病気も毒を撒く未知の犯罪者も、その姿を目に見ることはできない。都市富裕層と貧民、将校と兵士、地主貴族と農奴、そしてロシアとポーランドという様々な分断はコレラの前にもすでに存在していた。目に見えない病気の到来によって、隠されていた抑圧や亀裂が人々の前に視覚化されたのである。

注

- 1 *Пржецлавский О.А.* Воспоминания // Русская старина. 1874. Т. 11 С. 695–698.
- 2 Roderick E. McGrew, *Russia and the Cholera, 1823–1832* (Madison: Wisconsin UP, 1965)
- 3 *Богданов К.А.* Врачи, Пациенты, Читатели: Патологические тексты русской культуры XVIII – XIX веков, М.: О.Г.И., 2005.
- 4 *Мартьянова Л.* “Польские отравители” в 1830–1831 гг. // Русская филология 9. Сборник научных работ молодых филологов. ТАРТУ, 1998. С.41–50.
- 5 ロンドン、パリ、ベルリンなどの事例については、以下のように日本語の先行研究も多い。見市雅俊『コレラの世界史』晶文社、1994年。喜安朗『パリの聖月曜日——19世紀都市騒乱の舞台裏』平凡社、1982年。川越修『ベルリン：王都の近代』ミネルヴァ書房、1988年。
- 6 本論での日付はすべて旧暦（ユリウス暦）であり、新暦とは12日の差がある。
- 7 *Холера в Москве (1830)*. Из писем Кристины к графине С. А. Бобринской // Русский Архив. 1884. Вып. 5–6. С.137.
- 8 *Громбах С. М.*, Пушкин и медицина его времени. М.: Медицина, 1989. С.199–216.
- 9 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.103.
- 10 モスクワにいたクリスチンがペテルブルクの情報筋の話を伝える6月11日付の手紙によると、敵の仕業にせよ自殺にせよ、ディビチの死はコレラではなく毒によるものだと噂されている。コンスタンチン大公は6月3日付の弟のニコライ1世への手紙で、コレラ、毒殺、自殺、卒中の4つの死因説を挙げつつ、毒による自殺だと信じている者が多いと述べる。なお、この手紙のすぐ後でコンスタンチン自身もコレラで死去している。 *Lettres de Ferdinand Christin à une dame de sa connaissance, 1830–1831*. // Русский архив, вып. 5–6 (приложение), 1884. С. 148; *Correspondance de l’empereur Nicolas I et du grand duc Constantin*. // Сборник императорского русского исторического общества. Вып. 132. 1911. С.224.
- 11 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.106.

- 12 McGrew, *Russia and the Cholera...*, p.109.
- 13 Никитено А. А. Дневник в трех томах. Государственное издательство художественной литературы, 1955. Т.1. С. 107.
- 14 Пунарев А. Г. Холерный месяц в С.-Петербурге, июнь 1831 г. // Русская старина. 1885. Т. 47. С. 85.
- 15 Хорев В.А. Польша и поляки глазами русских литераторов. М.: Индрик, 2005. С.64.
- 16 Adam Mickiewicz, *Konrad Wallenrod* // *Dzieła*, Т. 3. (Warszawa: Czytelnik, 1949), s.100, 141–142; 『コンラット・ヴァレンロット』久山宏一訳、未知谷、2018年、74–75頁。栗原成郎『吸血鬼伝説』河出書房新社、1995年、157–160頁。久山は「幽霊女」、栗原は「死の乙女」という訳語を用いている。
- 17 Вацуро В. Э. Мицкевич в стихах Лермонтова // О Лермонтове: Работы разных лет. М: Новое издательство, 2008. С. 180–203.
- 18 Лермонтов М. Ю. Предсказание // Собрание сочинений в 4 томах. СПб.: Пушкинский дом, 2014. Т.1. С. 109. 『コンラット』との関係は注釈でも触れられている。
- 19 ミツキューヴィチの原作では *chustka* となっており、レールモンツフが読んだ可能性の高い『モスクワ通報』誌に掲載されたロシア語散文訳（1828年）では *платок* と同義の *плат* が使われている。Конрад Валленрод. Историческая повесть, взятая из Летописей Литовских и Прусских. Соч. Адама Мицкевича. Перевод С. П. Шеверева // Московский вестник 1828. Ч. 8, №8. С.387.
- 20 Никитено. Дневник в трех томах. Т.1. С.109.
- 21 *Братья Булгаковы*. Том 3. Письма 1827–1834 гг. М.: Захаров, 2010. С.190.
- 22 *Lettres de Ferdinand Christin...* С.157, 159.
- 23 Пушкин А. С. Собрание сочинений в 10 томах. Т.10. 1962. С.48.
- 24 Панаева (Головачева) А. Я. Воспоминания. М.: Правда, 1986. С.40–41.
- 25 ペテルブルクでポーランド人が医師を買収して人々を毒殺しているという噂を真に受けて書かれた屯田地の退役将校の手紙も見つかっており、民衆の間のデマの拡散は口伝によるものだけではない可能性もある。Егоров А. К. “Это, видно, Польша подкупила докторов так морить...”: к вопросу об источниках возникновения агрессивных слухов во время эпидемии холеры 1830/1831 гг. В России. // Научный журнал, 2016, №8 (9). С.32–34.
- 26 Бунт военных поселян в 1831 году: рассказы и воспоминания очевидцев. СПб., 1870. С.172–173.
- 27 *Братья Булгаковы*. Письма 1827–1834 гг. С.188–189.
- 28 *Lettres de Ferdinand Christin...* С.150–151.
- 29 皇帝官房第三部長官だったベンкенドルフの回想。Щильдер Н. Император Николай I в 1830–1831 гг. (из записок графа А.Х. Бенкендорфа) // Русская старина. 1896. Т. 88. С.88–89.
- 30 Давыдов Д. В. Анекдоты о разных лицах, преимущественно об Алексее Петровиче Ермолове // Сочинения. М., 1962. С. 509.
- 31 Мартыянова. “Польские отравители” в 1830–1831 гг.. С.47.

- 32 Мочалова В.В. Петербургские поляки (Сенковский, Булгарин) и Мицкевич // *Хорев В.А. Филатова Н.М. Цыбенко Е.З.* (ред.) Адам Мицкевич и польский романтизм в русской культуре. М.: Наука, 2007. С.118.
- 33 Смесь // Северная пчела, 21 февраля 1828, №22. С.3.
- 34 ノヴォシリツェフはそもそも 1823 年にヴィリニウスで知識人の団体フィロマチとフィラレチの摘発を実施して、ミツキューヴィチの逮捕とロシア国内への追放をもたらした人物である。ブルガーリンについても 1824 年末にポーランドの反体制派に通じた作家として報告している。Дубровин Н. Н.И. Греч, Ф.В. Булгарин и А. Мицкевич // *Русская старина*. 1903. №11. С.334–337.
- 35 Дубровин. Н.И. Греч, Ф.В. Булгарин и А. Мицкевич. С.337–351. 報告書は第三部の次官フォン＝フォークの名で出されているが、実際に文書を作成したのはブルガーリンだと考えられている。Рейтблат А. И. Видок Фиглярин: письма и агентурные записки Ф. В. Булгарина в III отделение. М.: НЛЮ, 1998. С. 16–18, 311–318.
- 36 ミウオシュはノヴォシリツェフの上申書を「すべての批評家がうらやむようなみごとな分析」だとして、若干の皮肉を込めながらも評価している。チェスワフ・ミウオシュ『ポーランド文学史』未知谷、2006 年、関口時正他訳、368 頁。
- 37 Петербургские записки о холере. // Северная пчела. №165, 25 июля 1831. С.3–4.
- 38 Беседа с крестьянами о нынешних обстоятельствах (Письмо к сельскому священнику). // Северная пчела. №222, 2 октября 1831. С.3–4; №223, 3 октября 1831. С.3–4.
- 39 Рейтблат А. И. Библиографический список прижизненных публикации Ф. В. Булгарина в периодических изданиях и сборниках. // НЛЮ, №135, 2015. С.392–417.
- 40 Рейтблат. Видок Фигулярин... С. 36.
- 41 Пушкин. О записках Видока // *Собрание сочинений...* Т.6. С.63–65.
- 42 Пушкин. «Не то беда, что ты поляк...» // *Собрание сочинений...* Т.2. С.334. Фигляринは 1825 年に詩人ヴァゼムスキーがブルガーリンにつけたあだ名で、フィгулярは「奇術師」の意味。Рейтблат. Видок Фигулярин... С. 37.
- 43 『僭称者ドミトリー』の「序文」ではヨーロッパに由来する自由恋愛の概念は、中世キリスト教的なモラルが支配的な当時のロシアにはまだ存在しないと言明されており、そうした設定がポーランドとロシアの境界線を行き来する主人公が体験する複数のロマンスを複雑なものにしている。ブルガーリンは道徳的にはむしろ後者のほうが優位にあるとしているが、ロシアの「愛国的」な読者を苛立たせる要因となったことは想像できる。Булгарин Ф. В. Предисловие. Дмитрий Самозванец // *Полное собрание сочинений*. Спб., 1842. Т.2. С.10–11.
- 44 Дельвиц А. А. «Дмитрий Самозванец». Исторический роман. Сочинение Фаддея Булгарина. // *Сочинения*. Л.: Художественная литература, 1986.
- 45 Анекдот // Северная пчела, 11 марта 1830, №30. С.1–2.
- 46 ブルガーリンはロシア帝国を離れて、一時期ナポレオンのフランス軍に勤務していたこともあるので、フランスへの帰属は単なる言い換え以上のニュアンスを含んでいる。
- 47 Второе письмо из Карлова на Каменный остров. // Северная пчела, 7 августа 1830, №94. С.4

- 48 *Пушкин*. Торжество дружбы, или оправданный Александр Анафимович Орлов. // *Собрание сочинений...* Т.6. С.79.
- 49 プーシキンが『ポルタワ』で描いたウクライナ・コサックの主人公マゼッパは、裏切者の形象としてミツキューヴィチの『コンラット』と対話的關係にあるとされる。*Ивинский Д. П.* Пушкин и Мицкевич: история литературных отношений. М.: Языки славянской культуры, 2003. С.187-207. ブルガーリンの『僭称者ドミトリイ』を比較に加えて考察することもできるだろう。
- 50 *Хвин С.* Уязвленная совесть. // *Новая Польша*, 2001, №5. С.52.
- 51 *Пушкин*. Из дневника 1831 года. // *Собрание сочинений...* Т.7. С.308-309.